



FULL COMBO

ここはとあるゲームセンター。大学の近くに立地しているため、来店するのはほとんどが大学生だ。時刻は午後5時頃。授業が終わった学生がちらほら増え始める頃だ。その一角にちよつとした人ばかりができていた。

その中心にいるのは1人の少年だった。細身で身長は低く、中性的な雰囲気だが着ている制服から少年だということがわかった。ここから数駅ほど離れた高校の制服である。

少年は音楽に合わせてプレイヤーがアクションをとるゲーム、いわゆる『音ゲー』と呼ばれるゲームをプレイしていた。その中でも少年がプレイしていたのは『ダンシングレボリューション』というゲームである。画面上を下から上に流れる上下左右の矢印型のアイコンにそれぞれ対応した足元のパネルをリズムに合わせて踏むゲームである。

比較的体を激しく動かすゲームだが、少年はその華奢な見た目に反し、軽々と次々に流れてくるアイコンを正確に踏んでいた。コンボが決まる度に周りで小さな拍手が起こるが少年は全く気付いていない。完全に自分の世界に入り込んでいるようだ。

最後の曲を終えたとき、ようやく少年は自分の周りに人ばかりができていることに気付いた。しかもその視線が自分に向けられていることに気付いた少年は急に気恥ずかしくなり、荷物を持って一目散にゲームセンターを後にした。

少年の名前は藤野楓。ダンシングレボリューション、通称『ダンレボ』が好きな高校1年生である。

2週間程前に高校に入学してからほぼ毎日のようにこのゲームセンターに通っているが、先ほどのようなギャラリーに囲まれるのは初めてだった。そろそろ大学生が授業をさぼり始める時期なのだろうか。目立つのがあまり好きでない楓にとってはいい迷惑である。このゲームセンターはちょうど通学路の途中にあり通いやすい位置にあるためできれば離れたくない。高校の近くにもゲームセンターはあるのだが、そこにはダンレボがないということが楓にとっては不満だった。明日は人が少なければいいな。と思いながら、そのまま家に帰った楓は自室でダンレボのサントラを聴いていた。

次の日、楓はいつものように早めに学校に向かった。まだまだ人の少ない教室内を横切り、誰にも挨拶せずに席に座る。入学してからいつもの光景である。

「おはよー」

「おっはよー!!」

始業時間のチャイムが鳴る直前、元気な声が教室に響いた。隣の席の松山日向である。彼は自分の席に座る前に楓に声をかけてきた。

「よっ、藤野！おはよー！」

「……おはよ。」

楓は控えめに返事をした。入学して席が隣同士になってから毎日の光景である。何故わざわざあまり親しくもない自分に向かつてわざわざ挨拶をするのか楓にはわからなかったが、おそらく席が隣だからとかそれだけの理由だろう。世の中にはこういった誰にでも分け隔てなく話しかけられる人間は一定数いるものである。そして、楓はそういった種類の人間が苦手だった。

あまりにそっけない日向は返答に少しショックを受けていたようだが、他の誰かに呼ばれたのかすぐにどこかに行ってしまった。彼のようなく明るく活発な人柄の人間には自分と違い、たくさんの人間が集まるのだ。

楓は昔からダンレボにしか興味がなかったせいか、いまいち周りの会話についていけなかった。他のものに興味を向けようとしても全く夢中になれず、いつの間にか周りから孤立していた。何故周りの人間はあそこまで色々なことに夢中になれるのか楓にはわからなかった。

自分はダンレボが好き。それでいいじゃないかという結論に至った結果が今の状況である。

その後担任が教室に入り、ホームルームが終わった後、いつも通りに授業が始まった。楓はいつも通り授業を受け、休み時間も予習をしたり音楽を聴いたりして1人で過ごしていた。そうこうしているうちに放課後がやってきた。楓が一番心待ちにしている時間である。

学校の最寄駅まで走り、電車に飛び乗る。そしていつものゲームセンターの最寄駅で降り、徒歩でゲーセンに向かう。これが彼のいつもの放課後だった。

ゲームセンターに入るとさっそく音ゲーのコーナーに向かった。毎回思うのだが何故音ゲーはこんなに奥まった場所にあるのだろう。確かにクレイゲーム等に比べるとマニアックなのかもしれないが。

音ゲーコーナーに到着した。今日は昨日と違い、割と空いているようだ。大学の授業時間の関係なのかはわからないがこれはラッキーである。水曜の夕方は空いている。これは覚えておいたほうがいいかもしれない。

楓はさっそくダンレボの筐体の場所に行きカードをかざした。筐体に光が灯り、クレジットの支払い方法やプレイモードを選択する画面が出る。それらをスキップしてようやく選曲画面に辿り着いた。

たまにはテンポが速い曲をプレイしてみようかと曲の検索方法を『BMPの速度』に設定した。探してみると何曲か知らない曲を見つけた。そういえばまた新曲が出たと聞いたな。知らない曲だがレベルを見た感じ初見でもクリアはできそうだ。今日の1曲目はこの曲にしよう。そう思い、楓は真ん中の緑色のボタンを押した。するとすぐにプレイ画面へと切り替わった。

音楽おんがくが流ながれ、少し間すこしまを置いてからアイコンが流ながれてきた。初見しよけんなだけあつて初めはじめはテンポが取りにくかったが、Bメロが終おわる頃ころにはだ**い**ぶ慣なれてきた。

楓かえではダンレボをしている時間じかんが一番好すきだった。周まわりの煩わづらわしい世界せかいから解放かいほうされ、ひたすら目の前めまえの譜面ふめんに集中しゆうちゆうすることができ、リズムと一体たいになれるような気きさえる。

いよいよこの曲きよくのサビの部分ぶぶんである。予想以上よそういじように連打れんだが多く、足あしがもつれそうになるが、なんとかコンボを繋つなげることができた。そしてラストは長押ながおしで終おわった。後うしろのバーに体からだをもたれさせ、軽かるく息いきを吐はく。

途中とちゆういくつかつまずいてしまったが、見事初見みごとしよけんでフルコンボを達成たっせいすることができた。次つぎは全すべてパーフェクトでクリアできるようにと思おもつてその曲きよくはお気きに入いりに登録とうろくした。

1曲目きよくめで今日きようは調子ちようしがいいと思おもった楓かえでは2曲目きよくめでも初見しよけんの曲きよくを選えんだがそちらはあと一歩いっぽの所ところでフルコンボを逃のがしてしまった。3曲目きよくめでも同様どうようだった。

今後は持久力こんご じきゆりよくが必要ひつようかな、と思おもいながら楓かえでが後うしろを振ふり向むくと誰だれかが立たつているのが見みえた。暗くらいので顔かおはよく見みえないがおそらく順番じゆんばん待ちまちの人ひとだろう。早はやく立たち去さろうと荷物にもつを持もつたときだった。

「あれ？ 藤野じゃん！」

どこかで聞いたことがあるような声がして思わず振り向くと、そこにはクラスメイトの松山日向がいた。

「学校近くのゲーセンに行っただけだ。ダンレボがなくてさー。そしたらここにはあるって聞いたから今日初めて来たんだ。藤野はいつも来てるのか。」

日向が言い終える前に楓はその場を離れた。いや、逃げ出したと言う方が正しいのかもしれない。ほぼ走るような勢いで楓は去ろうとしたが、

「おい、なんのつもりだよ。」

腕に僅かな痛みを感じ振り向くと、そこには険しい顔をした日向が立っていた。

そのまま逃げることも出来ずに筐体から少し離れたベンチまで連れて行かれた。その間日向の表情は見えなかったが、顔を見ていきなり逃げたのだ。普通に考えてもかなり失礼な行為である。しかし、逃げ出したのはほぼ条件反射だった。『あの時』のことを思い出し咄嗟に体が反応してしまい、日向のことを考えている暇はなかった。

日向は相当怒っているに違いない。先に謝っておいた方がいいだろう。

「あ、えっと、松山くん」

「……。」

「ご、ごめん。いきなり逃げ出したりして。」

「……。」

「え、えーと……。」

「言っておくけど俺おれそんなに怒おこってないぞ。」

その言葉に驚おどろいていると、それまでベンチに座すわりこんでいた日向ひなたが突然立ち上がりこちらに顔かおを向けた。その顔かおはいつも教室きょうしつで見かける

笑顔えかおと同じだった。

「なんで逃げたのかは気になるけど、そんなことより俺おれがお前に言いたいののは1つだけだ。」

日向ひなたは楓かえでに人差し指を向けて言い放った。

「俺おれと勝負しょうぶしろ！」

どういうことだ。全く日向ひなたの考えが見えない。いや、最初さいしよどう見ても怒おこってる感じだっただろう。言いたいことはたくさんあったが、楓かえで

にも突然逃げ出してしまった罪悪感ざいあくかんはあったので何も言わずに従したがった。

その後2人は再びダンレボの筐体の場所に戻った。別の人がプレイしている最中だったので周りに人がいないことを確認し、その後で待っていたのだが、その間終始無言だった。楓がチラリと隣の日向の表情を盗み見ると、彼は待ちきれないかのようにうずうずしているようだった。

「選曲はどうする？」

「そつちが決めればいいよ。僕はさつきやったし。」

「了解！」

日向はさつそく慣れた手つきで画面を操作し始めた。そこそこやり込んでいるのだろうか。

「やっぱり最初はこれかな。あ、レベルはこれでいいか。」

「うん。」

「よし！」

2人は中央の緑色のボタンを押した。『準備完了』の合図である。

最初の曲は比較的上テンポな曲だった。お互いに既にプレイしたことのある曲だったため、難なくクリアすることができた。楓がスコア画面を確認していると日向が声をかけてきた。

「なあ藤野ー。俺とお前のスコア欄見比べてみるよ。」

そう言われて楓^{かえで}が日向^{ひなた}のスコア欄^{らん}を見ると、日向^{ひなた}のスコアは楓^{かえで}のスコアよりも遥^{はる}かに低^{ひく}いことに氣付^{きづ}いた。

「あれ？ 松山^{まつやま}くんクリアできなかったの？」

「バ、ちげーよ！ GOOD^{グッド}を大量に出したんだよ！」

話は少し変わるが、ここでの『ダンシングレボリューション』というゲームの採点基準^{さいてんきじゆん}について説明^{せつめい}する。このゲームでは画面上^{がめんじよう}のアイコンに下から流れてきた矢印^{やじるし}状のアイコンがぴったり重なったときが一番得点^{いちばんとくてん}が高く、得点^{とくてん}が高い順^{じゆん}にMARVELOUS、PERFECT、その次^{つぎ}がGREAT、GOODと判定^{はんてい}が出る。ちなみに失敗^{しっぱい}するとMISSという判定^{はんてい}が出る。GOOD以上の判定^{はんてい}だとゲージが溜^たまっていき、ゲーム終^{しゆう}了^{りよう}時にゲージが0より上だと『クリア』となる。MISSだとコンボが途切^{とぎ}れ、ゲージの値^{あた}も減^へっていく。

MISS^{ミス}が続^{つづ}き、ゲージの値^ちが0になってしまうと、たとえ曲^{きよく}の途中^{とちゆう}であつても強制終了^{きようせいしゆうりよう}となつてしまう。つまり、最後までプレイしたければGOOD以上の判定^{はんてい}を狙^{ねら}えばいいのだ。しかしGOODだとスコアが入らないので、スコアを得るためにはGREAT以上^{ぐれいといじよう}を狙^{ねら}わないといけない。日向^{ひなた}はそれを逆手^{さかて}にとり、あえてGOODばかりを狙^{ねら}うことによつてロースコアを叩^{たた}き出したということだ。

「……分^{わか}つたけどそんな遊び^{あそび}方^{かた}してる人^{ひと}初めて見た。」

「だろ？ 俺^{おれ}ぐらいしかやってないだろうな！」

日向は得意気に胸を張った。

「とりあえず早く次の曲選んだら？ 時間ないよ。」

画面を見ると残り時間があと僅かだったので日向は急いで選曲をした。

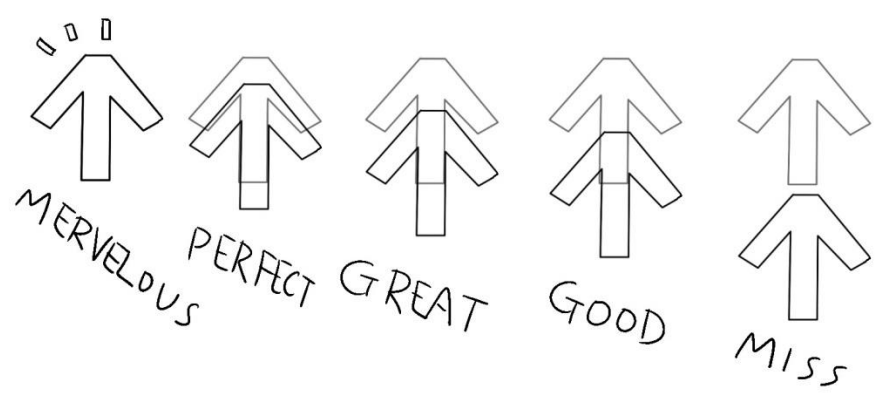
2曲目は先ほどと同レベルの曲だが楓がプレイしたことのない曲だった。時間終了間際に急いで選曲をしたせいか日向も知らない曲らしい。

「まあレベル的にクリアはできるだろうけど気を付けて。」

「わかってるよ。2人ともゲージが空になったらそこで終わりだからな。」

2人ともなんとかクリアすることができた。いよいよ3曲目である

。



「最後はお前が決めていいぜ。」
「いや、僕は別に……。」

「ここまで付き合ってもらったんだからお礼だよ。」

日向にそこまで言われたのでじゃあ……。と楓はある曲を選んだ。

「あ、確かこの曲新曲だよな。できるかな。」

楓が選んだ曲は先ほど1人でプレイした時に初見でフルコンボを達成した曲だった。日向は初見で自信がないらしいが、楓も先ほど初めてプレイしたばかりなため、同じく自信はあまりない。

「まあ、どっちにしろこれで最後だからな！最後は真剣勝負しようぜ！」

ボタンを押しながら日向が言った。楓はそれに対して特に反応はせずボタンを押した。とにかく目の前の曲に集中したかった。

先ほどと同じくイントロが始まりしばらくしてからアイコンが流れてきた。最初はさほど難しくもないので2人ともほぼパーフェクトだ。

軽く息を弾ませながらも途中までは順調にこなしていた。いよいよ最難関のサビの部分である。

「……っ！」

一瞬、隣の日向が息を詰めたのが楓にも分かった。当然だろう。楓がフルコンボを達成したのも奇跡だったのかもしれない。それでも

最後まで諦めたくなかった。1回目よりもハイスコアで、フルコンボでクリアしたい。その一心で楓は画面を見つめていた。

「はあ……。」「

そして最後の長押し。緊張が解れる瞬間である。楓が得点画面を見るとミスはなかった。しかも先ほどよりもスコアが高かった。

よし！ 楓は心の中で飛び上がりそうな程に喜んでた。そのとき隣からうめき声が聞こえてきた。頭を抱えて唸っている日向である。

日向の方の得点画面を見ると、ミスが1つだけ付いていた。

「残念だったね。」

「あと一歩だったのに……。にしてもお前すげーな。これレベルは低いからクリアは簡単だけどフルコンボとなるとなかなか難しそうじゃん。」

「いや、さっき1回やってたからだよ。」

「それでもすごいよ。ほんと」

2人が話していると、周囲から拍手が起こった。プレイに夢中で気づいていなかったが、いつの間にかギャラリーが集まっていたらしい。

楓は即座に逃げようとしたが、周りを完全に囲まれているため逃げられない。

「いやー。ここ凄いいんだな。こんなにギャラリーが集まっているの初めて見た。ここ通おうかな。」

上機嫌で周りに手を振る日向とは対照的に、楓は狭い筐体の隅で縮こまっていた。

ようやくギャラリーから解放された2人はゲームセンターから出た後、駅の方面に向かっていた。

「いやー、楽しかったな。またやりたいわ。」

「はは……。」

はつきり言って冗談じゃないと思った。もう先ほどのようなことは勘弁したい。

「じゃあな！　また明日も来ようぜ！」

「え？」

日向は駅に着くとそのまま自転車置き場に向かって行ってしまった。残された楓はまたあいつに付きまといわれるのかとうんざりした。

次の日、楓はいつも通り早めに学校に来了。ちなみにこの時間帯に来るのは別に何かあるわけではなく、電車の時間の都合である。

「藤野くん。ちょっといい？」

呼ばれたので声がした方向を向くと、同じクラスの女子が立っていた。楠木菜穂である。明るい性格でよく友達と談笑している姿を見か

けるが、当然楓との接点はない。

「あのね、今日私と藤野くんが日直だから分担をどうしようか話し合おうと思って。日誌は私が持ってきたんだけど。」

このクラスでは日直は男女2名のペアで行うことになっている。といっても仕事内容は花の水やりや授業後の黒板消し、移動教室の際の

鍵締め等そこまで難しいものではないので正直1人でも行えそうなものばかりである。

「今日3限目体育があるけど男子は教室で着替えるでしょ？　鍵当番はお願いしてもいいかな。」

「うん。いいよ。……そういえば楠木さん何か部活に入ってる？」

「え、えっと、美術部だけど……。」

いきなり所属クラブを訊かれて一瞬戸惑う菜穂だがとりあえず答えておいた。

「じゃあ放課後部活だね。放課後の仕事は僕がやっておくよ。」

「え、でも……。」

「別に帰宅部で暇だし良いよ。」

これには理由があった。日向は昨日『一緒にゲームセンターに行こう』と言った。ならおそらく放課後に向こうから誘いに来るはずである。

日直で帰りが遅くなるという理由を付けておけば、誘われても断ることができる。そうすれば昨日のようなことになることはないだろう。もし彼が昨日のことを忘れていて誘いに来なかったならそれはそれで別にいい。

「わあごめんね！ じゃあ日誌と黒板消しは私がやっておくから藤野くんは鍵締めと放課後の仕事よろしくね！」

「うんわかった。」

楓が答えるのと日向含めた男子生徒数名が教室に転がり込んでくるとホームルームの予鈴が鳴るのはほぼ同時だった。毎朝思うのだがもう少し早く登校できないのだろうか。

「よ！ 藤野おっはよー！」

「おはよ。」

「……昨日^{きのう}せっかく仲良くなったのにお前は相変わらずだな。まあいいけどさ。」

昨日^{きのう}仲良くなった覚えはないので楓^{かえで}は無視をした。少なからず日向^{ひなた}は傷ついたようだがまあいい。

その日もいつも通り授業^{じゅぎょう}が進み、そして放課後^{ほうかご}が来た。菜穂^{なほ}は申し訳なさそうにしていたがどうせすぐに終わ^おる用事だから気にする必要はない。そのことを告げると菜穂^{なほ}は少し表情を明るくして部活^{ぶかつ}へと向かった。

その後淡々と仕事をしていた楓^{かえで}だが、日向^{ひなた}が声をかけてくることはなかった。やはり忘れているのか……。楓^{かえで}は安心して日直の仕事をし、ゲームセンターへと向かった。遠くで運動部の掛け声^{かけこえ}や吹奏楽部の楽器^{おと}の音が響いていた。

楓^{かえで}はゲームセンターに着いてすぐにダンレボの筐体^{きょうたい}の方に向かった。するとそこには意外な人物がいた。

「よお。遅かったな。」

「え、なんで松山^{まつやま}くんがここに。」

そこにいたのは日向^{ひなた}だった。楓^{かえで}は驚きを隠せなかった。

「昨日^{きのう}『また明日来よう』って言ったじゃん。覚えてねーのかよ。」

ケラケラと笑いながら答える日向ひなたに対し、楓かえではショックを受けていた。迂闊うかつだった。あれは『一緒に行く』という意味ではなかったのか。

学校がっこうでなんのアクションもなかったせいで完全に油断していた。

「て、ことで早速勝負しようぜ。」

日向ひなたに腕を掴まれるが、楓かえでには抵抗する気力もなかった。

「く、くそー！全然勝てねー！」

早速ダンレボで対戦をした2人だが、あと一步の所で日向ひなたは楓かえでのスコアを追い越すことができなかった。3曲きよく終えたがその全てにおいて楓かえでに勝つことができなかったのである。集中力が全く違うのである。楓かえでは目の前の画面がめん、音楽おんがく、足元の感覚全てを全身で感じている気がした。

「別に勝てなくてもいいんじゃない？GOODグッドを極めるんでしょ？」

「いや、お前にはなんとなく勝ちたいんだ！なんてったってライバルだからな！」

いつの間にライバルになったんだ。訳の分からない理屈を並べられた楓かえではうんざりしながらも答えた。

「うん。頑張がんばれ。」

「……なんかムカつくな。まあいいや、他の機種でも勝負しようぜ。」

その言葉を言われた楓かえでは一瞬戸惑った。

「あ、いや、僕はダンレボしかやらないから。」

「ん？どうした？ひよっとして俺おれに負けるのが怖いからとか……。」

何も言わない楓かえでに日向ひなたは首をかしげたが、特に何も言わなかった。

「まあいいや。じゃあ俺おれ向こう行ってる。」

日向ひなたは他の機種の方へ向かった。

「ふう……。」

ようやく一人になれた楓かえでは近くのベンチに座り込んだ。なんなんだあいつは。自分じぶんは1人ひとりで楽しみたいのである。昨日きのうのように注目を集める可能性もあるのでなおさら彼かれとは関わりたくない。とりあえず飲み物でも買うかと楓かえではベンチを立った。

「おーい！藤野ふじの！」

遠くから呼ばれている気がするがどうせ日向ひなただから放っておこうと思ったのだが。

「藤野ふじの！聞こえないのか藤野ふじの！」

「……。」

周囲の視線が気になってきたので渋々日向ひなたの方に向かった。

日向は先ほど別れてから別の音ゲーをしているようだった。日向がやっている音ゲーは音楽に合わせて光る4×4に並んだパネルを押していくという音ゲーである。楓はプレイしたことがなかったがメジャーな音ゲーのようだ。他の筐体よりも小振りである。

「今日は新曲をやるうと思ってるんだけどさ。そういや藤野はこれやったことないのか？」

「音ゲーならダンレボ以外やったことないよ。」

「……本当にダンレボしかやったことないのか。」

日向は少し驚いた顔をしていたが、楓には何がおかしいのかが分からない。好きなことだけをしている。それだけである。

日向は気を取り直してゲームの設定を変更していた。どうやらパネルの光り方にもいくつかの種類があり、日向はそれを設定しているようだ。エフェクトによってやり易さが大分変わるらしい。

「個人的にこのエフェクトが一番やりやすいかな。」

何種類もあるエフェクトの中で日向が選んだのは花が開くような動きをするエフェクトだった。花が完全に開くのと同じタイミングでパネルを押せばPERFECTとなるようである。

「エフェクトによってスコアが全然変わってくるんだよな。曲は……これでいいか。」

どうやら選曲を終えたらしい。このゲームはオンラインマッチングといって、その時間に同じ曲をプレイしようとしている全国の人と最大4人まで同時に対戦できるのだが、今回はその最大人数である4人と対戦できるようだ。

日向が早速筐体に手をかざす。曲が始まる前の一瞬、手の位置を軽く確認しているようだ。

筐体から『Ready Go』と合図が聞こえ、曲が始まった。冒頭から彼方此方のパネルが光っては消えていく。花火みたいだな。と楓はぼんやりと思った。

画面を見る感じ日向もいい感じにコンボを重ねているようだが、他の3人も負けじとスコアを積み上げている。1位が激しく入れ替わる。ふと、楓は日向の顔を見ると、彼は笑っていた。順位が激しく入れ替わるこんな接戦でも彼はあくまで楽しんでいて。昨日はプレイ中の彼の様子は見られなかったが昨日ダンレボをプレイしているときもこんな感じだったのだろうか。

楓がぼんやりと日向を観察している内に曲が最後まで終わった。本当はプレイに夢中になっている間に帰ろうと思っていたのだが思わず日向の様子に見入ってしまった。総スコアは日向の自己ベストを更新し、他の3人の中でトップである。

「よっしゃ！ほら見ろ！」

「あ、すごいね。」

「反応薄！」

日向は楓の反応に不満なようである。しかし気をとり直して選曲を始めた。

次の曲をプレイしている間も楓は彼を観察し続けていたが、彼はやはり最後まで楽しんでいて。他人がプレイしている様子を見たことがない楓には新鮮に思えた。自分以外にもここまで音ゲーを楽しんでいる人が他にいたんだ。それもこんな近くに。そう思うと楓は不思議な気持ちになった。今までに感じたことのない感情が体の奥からじわじわと湧き上がってくる。

「あー疲れた。」

日向は近くにあったベンチにドカッと座り込んだ。楓も日向の隣に座り込む。何故だか先ほどまで日向に抱いていた嫌悪感^{けんおかん}は消えていた。

「そういえば今日^{きょう}まともに話すの初めてだな。」

周りの雑音^{ざつおん}に負けないよう少し大きめの声^{こえ}で日向が話しかけてきた。

「うん。確かにそうだね。学校^{がっこう}でも話さなかったし。」

「俺^{おれ}は休憩時間^{じかん}中もサッカーやったりしてるからな。藤野^{ふじの}もサッカーすればいいのに。」

「あんまり興味ないかな。」

「……お前ほんとダンレボ以外興味ないな。どうしてそんなに好き^すなんだ。」

「昔ダンレボのプレイ動画を見てかっこいいと思ったから。」

「それだけ？　じゃあ他の機種には……。」

「僕はダンレボしかプレイしない。」

「まあ藤野^{ふじの}らしいか。」

日向は笑いながら答えた。自分^{じぶん}らしいってなんだと思ったがまあ気にしないでいい。

「……松山^{まつやま}くんはどうして音ゲー^{おと}を始めたの？」

「俺おれ？ 小学校の時いとこ従兄が勧めてくれたからだよ。」

小学生に音ゲーおとを勧めるってどんな従兄だよと思ったが突っ込まないでおいた。

「たまたまゲーセンに連れて行ってもらったんだけどさ。その時に一緒にダンレボやったらすっげー褒められて。リズム感はないのに反射はんしゃ神経しんけいだけはすごいとか。」

「え、松山まつやまくんリズム感ないの？ それなのにどうやって。」

音ゲーおととは音楽おんがくやリズムに合わせてアクションを取るゲームのことである。リズム感もないのにどうやってあそびまでのスコアを叩き出しているのだろう。

「全部目押しだよ。初見しよけんでBPMがコロコロ変わる曲きょくにも対応できるし便利だぜ。GOODグツドも狙いやすいし。」

驚いた。昨日きのうのあの珍プレイは全て目押しだったようである。確かに目押しでも可能ではあるが、やはりリズムに乗ってプレイした方が遥かに楽だと思ふのにそれをしてしまうとは。楓かえでは思わず笑ってしまった。それを見た日向ひなたも笑みを零した。

「やっと笑ったな。」

「ん？」

「いや、藤野ふじのが笑ってる所初めて見たからさ。なんというか安心した。」

楓は首を傾げた。確かに自分が笑っている場面は珍しいのだろうがそれでも『安心した』というのが分からない。それを見た日向は慌てて訂正した。

「いや、安心したつてのはおかしいな。嬉しかったっていうか。」
「？」

「実はずっと探してたんだ。同じように音ゲー好きな奴を。で、やっと見つけた。寂しかったんだよ。同じ趣味の友達がいなくてちよつとさみしかったんだ。」

「……松山くんでも寂しいって思うことあるんだね。」

「は、失礼な！俺をなんだと思ってるんだよ！」

日向は顔を真っ赤にして反論してきた。日向のような人間でも寂しいと思うことがあるのか……。楓には意外に感じられた。

「好きなことを誰かと共有できるってすっげーいいことじゃん。お前もそうだろう？」

誰かと好きなことを共有する……。考えたこともなかった。何故なら自分の世界に没頭して、ただひたすらにハイスコアを目指すことこそ

が真の楽しみ方だと思っていたからである。対戦も昨日が初めてだった。

「うーん。よく分からない。」

「まあいいか。じゃあとりあえず1つ聞いていいか？」

「何？」

「昨日^{きのう}なんで逃げたんだ？」

楓^{かえで}は内心ドキリとした。昨日^{きのう}は特に何も言われなかったが実は気にしてはいた。いつかは謝らなければならないと。日向^{ひなた}は楓^{かえで}の目をジッと見つめる。

「いや、別に、松山^{まつやま}くんは悪くないよ……。ほぼ条件反射だったというか……。」

「どういうことだ？」

いつまでも黙っているわけにはいかない。正直に話しておいた方がいいだろうと思い、楓^{かえで}は話し始めた。

「昔ゲーセンでダンレボをやってる時にクラスメイトがたまたま通りかかって音ゲー^{おと}やってることをからかわれたことがあつてさ。昨日^{きのう}の

ことがその時のことと重なったというか。だから別に松山^{まつやま}くんは悪くないよ。僕が悪いんだし。」

日向^{ひなた}は黙って話を聞いていたがやがて口を開いた。

「お前、そんな風にかかわれても音ゲー^{おと}をやめようとは思わなかったんだな。」

「うん。だって、ダンレボは好き^すだし。」

自分の世界^{せかい}に没頭して、ただひたすらにハイスコアを目指すことが好き^すだった。それだけはけっして譲れなかった。たとえバカにされても。

「でも、松山^{まつやま}くんと一緒にプレイしたことは楽しかったよ。」

「……そうか。ならよかった。」

日向はホッと息をついた。

「きっとそれは藤野にとってダンレボをプレイすることが一番『自然』なんじゃないかな。」

「自然？」

「そう。きっとダンレボをしてるときが一番自然体でいられるんだよ。さっきプレイしてた時も教室でいるときと段違いの会話量だったしな。」

そんなに話していたのだろうか。楓は少し疑問に思った。でも楓には少し心当たりがあった。

「よくわからない……。でも、そうかもしれない。家にいる時よりも、教室にいる時よりも、筐体の上が一番楽しい。」

俺もだ。と日向は言った。

「好きなことにそこまで夢中になれるってすごいことじゃん。誰にバカにされても気にする必要はねーよ。」

その後ゲームセンターを出た2人は並んで駅まで歩いていった。日向は駅に自転車を止めているらしい。

「なあ、明日も放課後一緒にプレイしないか？今日の曲のリベンジもしたいし。」

「うん。」

「あーでも明日俺^{おれ}日直なんだよな。遅くなってもいいか？」

「別にいいよ。待っておく。」

話しているうちに駅まで辿りついたようだ。日向^{ひなた}は駅の駐輪場に停めている自転車の鍵を開けた。

「じゃあな！また明日！」

日向^{ひなた}が自転車に乗りながら手を振った後、楓^{かえで}も小さく手を振った。

「また明日。」

同じ趣味をもつ仲間を見つけて嬉しかったのは日向^{ひなた}だけではなかったのだろう

